

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書(欧文)) 1. 『Living as Global Citizens: An Introduction to Sustainable Development Goals』	共著	2021年4月	南雲堂	地球市民とSDGsをキーワードに制作した、英語で学ぶSDGs実践入門書。学習者が身近な日常から問題解決に向けたアクションを起こせるように、地球市民教育論の参加型問題解決学習の手法を取り入れ、新しいタイプの英語テキストの開発を試みた。本学教員Kevin M. McManus氏との共著。(著者：小関一也、Kevin McManus)
(著書(和文)) 1. 『地球市民への入門講座：グローバル教育の可能性』	共著	2001年5月	三修社	大学教育に新しい視点を取り込むことを目的とし、地球市民教育(グローバル教育)の基本となるパラダイムを紹介した入門書。東洋大学国際交流センター所長の宇田川義晴教授の依頼を受けて、アクティビティを含む新しい大学テキストづくりを試みた。第二章「グローバル教育の全体像」(P29-P52)、本書の構成(P5-P6)、「用語集」(P153-P161)を担当。(監修宇田川義晴、著者小関一也、小島健太郎、尾崎司、浅川和也、桜井高志)
2. 『教育の可能性を読む』	共著	2001年5月	情況出版	グローバリゼーションの進行と教育の変容をテーマとする学際的な研究書。『情況』に寄稿したM. アップルの日本未発表論文の翻訳が、米国の教育社会学の動向を鋭く分析した論文として本書に再収録された。第二部「現代の教育論の展開」の「権力・意味・アイデンティティ：アメリカ合衆国の批判的教育社会学」(P180-P207)を担当。(著者島田雅彦、佐藤学、西澤晃彦、広瀬裕子、西口正文、赤尾勝己、田中節雄、斎藤寛、早川操、田中智志、マイケル・W・アップル、松本無双、柳沼良太、小関一也、黒沢惟昭、後藤総一郎、粉川哲夫、村上陽一郎、本田和子、最首悟、好村富士彦)
3. 『グローバル教育からの提案：生活指導、総合学習の創造』	共著	2002年3月	日本評論社	トロント大学グローバル教育研究所の所長であったD. セルビー教授と同大学訪問教授であった浅野誠氏が注視となり、日本とカナダ両国のグローバル教育研究の成果を記した研究書。最先端のグローバル教育理論と実践が収められている。第一部「多様性の中の統一、統一の中の多様性」の「グローバル時代の教育のために：国家中心のパラダイムを越えて」(P68-P76)を担当。(編者浅野誠、デイヴィッド・セルビー、著者ジェニファー・サーバー、小関一也、グラハム・パイク、鈴木和夫、高橋由佳、コンスタンス・ラッセル、アン・ベル、ウェンディ・アグニュー、浅川和也、渡辺雅之、バートラム・タルク、マリー・ラディーノ、碓合宗隆)

4. 『グローバル・クラスルーム』	監修 監訳	2007年12月	明石書店	グローバル教育の世界的指導者であるG. パイクとD. セルビーによる現在の到達点といえる著作。原著は全2巻14章で構成され、環境・開発・人権・平和などのテーマ別に、要点の解説と計200ほどのアクティビティが紹介されている。日本語版は約300ページの単本で、私自身の経験をもとに88のアクティビティを厳選してある。また巻末に拙論が2本掲載されている。 「『外へ向かう旅』と『内へ向かう旅』：G. パイクとD. セルビーのグローバル教育論の独自性」 「グローバル教育の曖昧性と定義」（著者グラハム・パイク、デイヴィッド・セルビー、監修・監訳小関一也）
5. 『未来をつくる教育ESDのすすめ』	共著	2008年12月	日本標準	多田孝志氏の依頼で、「ESDにおける共生～合意や一致を超えたつながり」をテーマにコラムを執筆(P18-P19)。 多田孝志、手島利夫、石田好広著 (コラム執筆者 小関一也、山田裕)
6. 『グローバルな参加をつくる』	共著	2010年3月	マイブックス	「第9章 多様な価値から自己をみる」(P52-P58)を担当。早稲田大学でのグローバル教育の講義に関して、インタビューを受けた。『新英語教育』No. 351に転載された内容が単行本として再録されたもの。
(学術論文(欧文)) 1.				
(学術論文(和文)) 1. 「『民主的道德教育』に関する考察：その理論的構造と問題点」(査読付き)	単著	1995年3月	『フィロソフィア』No. 82早稲田大学哲学会	1958年の「道德の時間」の特設以来、わが国の道德教育には、文部省(現文部科学省)が主導する道德教育とこれに反対する民間教育活動の道德教育という2つの大きな潮流が認められる。拙論では、後者の道德教育を「民主的道德教育」と呼称し、その理論的構造と問題点について考察した。(P137-P150)
2. 「地球時代のアイデンティティ：グローバル教育からの提言」	単著	1999年10月	『教育』No. 645 国土社	文部省(現文部科学省)による国際理解教育の限界を示し、現代の「グローバル化」に対応する新たな教育の必要性を説いた。特に「国家」を前提とする「国際化」と「国家」を越えた「グローバル化」の違いに着目して、「ナショナルアイデンティティ」に代わる「グローバルアイデンティティ」の特質を分析した。(P55-P62)
3. 「地球市民教育の実践課題：地球市民教育概念の構造的な理解を中心として」(査読付き)	単著	2002年3月	『国際理解』No. 33 帝塚山学院大学国際理解研究所	第26回国際理解教育賞論文で「国際文化フォーラム賞」を受賞。日本の国際理解教育研究において最も権威と伝統のあるコンクールで上位5編に選出された。拙論では、「地球市民教育」の概念が理論的に構造化されないまま多義的に曖昧に使用されてきたことを問題として設定。日・米・加の代表的なグローバル教育研究者の理論を手がかりに、3つの鍵概念と2つの基本領域という分析視軸を抽出して、地球市民教育の実践課題に対して構造的な理解を試みた。(P133-P144)

4. 「日常と世界の連続性、『文化のグローバル化』からの提言：ちがいを乗り越え共生・協同するために」	単著	2002年3月	『国際理解』No. 33 帝塚山学院大学国際理解研究所	「提言：国際理解とグローバル化」の特集に、日本国際理解教育学会を代表する研究者(米田伸次、川端末人、田淵五十生、多田孝志他)とともに寄稿。拙論では、豊かなちがいを創出する「文化のグローバル化」に言及し、グローバル教育における3つのものの見方(「全連関性」「多元性」「変容性」)から、日常と世界とのつながりを意識していくことの重要性について論じた。(P71-P73)
5. 「『外へ向かう旅』と『内へ向かう旅』：G. パイクとD. セルビーのグローバル教育論の独自性」	単著	2007年12月	『グローバル・クラスルーム』 明石書店	主要なグローバル教育研究が「グローバルな世界」の探求に焦点化しているのに対して、G. パイクとD. セルビーは「世界」と「自己」の探求の相即性を重視する。これこそが2人のグローバル教育の核心でありながら、その真意は理論的に未整理なまま実践者の解釈に委ねられている。拙論では、グローバル教育においてなぜ「外へ向かう旅」が「内に向かう旅」となりうるのか、また2つ旅はどのようにつながりあっているのか、これらの問いにアプローチした。(P290-P297)
6. 「グローバル教育の曖昧性と定義」	単著	2007年12月	『グローバル・クラスルーム』 明石書店	拙論の目的は、多義的で曖昧なグローバル教育の概念を定義づけることにある。多くのグローバル研究者がその定義の曖昧性を問題にしてきたが、一方でその曖昧性ゆえに柔軟で独創的な実践が可能なのだと主張する者も少なくない。拙論では、これまでの欧米におけるグローバル教育研究動向を踏まえて、目標・内容・方法の3点から共通項を抽出し、できるだけ広い視野からグローバル教育を定義づけた。(P298 - P302)
7. 「多元性・多層性から読み解くグローバル・シティズンシップ：『グローバルなものの見方』を基軸として」(査読付き)	単著	2011年6月	『国際理解教育』No. 17 日本国際理解教育学会	日本国際理解教育学会の第20回研究大会で特定課題研究として発表した内容を論文にまとめたもの。「グローバルなものの見方(global perspective)」を視軸として、現在のグローバルな世界をどのように読み解くことができるのか、またそのような世界で育成されるべきグローバル・シティズンシップについて、学会の研究動向と重ね合わせ論じている。(P47-P54)
(紀要論文) 1. 「道德教育の発達論的基礎に関する一考察：J. ユーニスのコミュニケーション的関係のモデルを考察対象として」	単著	1991年1月	『早稲田大学教育学論集』No. 13 早稲田大学大学院文学研究科院生教育学研究会	アメリカの社会認知心理学者J. ユーニスが提唱する「コミュニケーション的関係」のモデルと従来の認知発達理論の「自己省察モデル」の特質を比較・分析することを通して、道德教育の発達論を構築するために必要な理論的枠組みを考察した。(P40-P51)

2. 「『協同』の教育のための発達理論」	単著	1993年2月	『早稲田大学大学院文学研究科紀要、哲学・史学編』No. 38 早稲田大学大学院文学研究科	教育実践が人と人との豊かな交わりを前提にしているのに対して、従来の発達研究は個々人に限定された心理や能力を研究対象としており、人間的な交わりを扱う有用な理論を提起してこなかった。拙論では、国内外の主要な発達理論研究に批判的な分析を試み、「協同」(collaboration)を鍵概念として人間的交わりを扱う発達研究の新動向について分析した。(P210-P213)
3. 「J. ユーニスの発達研究：その全体像と教育実践に対する可能性」	単著	1994年2月	『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊、哲学・史学編』No. 20 早稲田大学大学院文学研究科	J. ユーニスの発達研究を取り上げ、人と人との豊かな交わりを前提とする発達研究の可能性について論じた。特に、古典でもあるピアジェ理論と比較することで、ユーニスの発達観や子ども観が決して奇抜なものではなく、ピアジェ理論の再解釈として位置づけうることを論証した。(P73-P82)
4. 「子どもに生きる力を育む指導を目指して」	単著	1995年11月	『教育』No. 594 国土社	第34回教育科学研究会全国大会「道徳と生活指導」分科会での議論踏まえて、「いじめ」や「非行」を乗り越える「生きる力」を育むための指導のあり方について検討を試みた。(P92-P96)
5. 「地球時代のアイデンティティ：グローバル教育からの提言」	単著	1999年11月	『教育』No. 645 国土社	当時の国際理解教育の限界を示し、新たな「国際化」に対応する教育のあり方について、グローバル教育を視座に提言。「多元性」「相互依存性」「未来志向性」の3点から、地球時代のアイデンティティについて論じている。(P55-P62)
6. 「水戸の小学生に向けた沢渡川流域の環境教育プログラムの開発」	共著	2015年3月	『人間科学』Vol. 32 No. 2 常磐大学人間科学部	学内課題研究プロジェクトの最終報告をまとめた論文。「準備プログラム『沢渡川で遊び、考え、行動しよう!』」を担当。2日間、計4回のセッションを、児童と保護者のアンケートを中心にふりかえり、プログラムの有用性を検証した。(P55-P66) (著者：松原哲哉、秦順一、小関一也、鈴木宏明)

7. 「SDGs：子どもたちに育みたい力」	共著	2020年3月	『この本読んで』 編集：博報堂 出版：メディアパル	絵本雑誌『この本読んで』の特集記事。東京大学の前田君枝氏と「子どもたちの未来とSDGs絵本」に寄稿。SDGsを通して、子どもたちに育みたい力について、平易な文章で論述した。(pp. 32-33) (著者：小関一也、前田君枝)
(辞書・翻訳書等)				
1. 「権力・意味・アイデンティティ—アメリカ合衆国の批判的教育社会学」	共訳	2000年3月	『情況』 2000年4月号 状況出版社	アメリカの批判的教育社会学の指導者M. アップルの論文を著者の承諾のもとに翻訳した。すべての翻訳作業は脚注を含めて、訳者3人の共同作業によって行われた。(訳者松本無双、柳沼良太、小関一也) (P70-P97)
2. 『グローバル・クラスルーム—教室と地球をつなぐアクティビティ教材集』	単著	2007年12月	明石書店	原著全2巻(計511頁)を日本版として再編集。日本の実情に合わせて、88のアクティビティ教材を選定し、加筆・修正を加えた。(ディヴィット・セルビー、グラハム・パイク著、小関一也監修・監訳) (P322)
(報告書・会報等)				
1. 「グローバル教育の宇宙：多様な価値から自己をみる」	共著	1998年11月	『新英語教育』No.351 三友社	早稲田大学教育学部での小関グローバル教育の講義・実践について検証し、共著で出版。48-49頁(著者小関一也、浅川和也)
2. 『みんなでつくる「総合学習：地域と自分の再発見』	共著	1999年12月	グローバル教育・西東京センター	グローバル教育の特徴を紹介したハンドブック。主に理論編を小関が、実践編を桜井が草案づくり、共同して加筆・修正を加えた。1-24頁(著者小関一也、桜井高志)
3. 「グローバル教育用語集」	単著	2001年5月	『地球市民への入門講座』明石書店	グローバル教育に関するミニ用語集。153-161頁
4. 「理解を深めるためのブックガイド」	単著	2007年12月	『グローバル・クラスルーム』明石書店	グローバル教育の理解を深めるためのブックリスト。310-313頁
5. 「これからの時代を生きる子どもたちへ」	単著	2009年11月	『Be-Go Global Parent's Magazine 1』(株)ベネッセコーポレーション	小学生英語教材「BE-GO Global」の販売を記念した開発者から両親への巻頭メッセージ。3頁
6. 「新地球温暖化・気候変動防止条約：コペンハーゲンへの道」	単著	2010年1月	『THE T. I. T. E. REVIEW』常磐大学教育実践研究所	Eric Jonhston氏の講演に対する質疑応答の要約。7頁
7. 「Book Review ワークショップガイド」	単著	2010年5月	『新英語教育』No.489 三友社	浅野誠『ワークショップガイド』アクアコラール企画の書籍紹介。42-43頁。

8. 「特集1 世界への興味を育てる！グローバルプレイパック120%活用術！」	共著	2010年7月	『Be-Go Global Parent's Magazine 5』（株）ベネッセコーポレーション	[BE-GO Global] の教材「Taliking World Map」の活用術についてインタビューに応える形式でまとめたもの。1-3頁。
9. 「特集2 グローバルマインドを育むために、家庭で今すぐできること 日常に隠れている『海外』を見つけよう！」	共著	2010年7月	『Be-Go Global Parent's Magazine 5』（株）ベネッセコーポレーション	日常身近なところに「海外」をみつけていくことの大切さと方法について、監修者としてコメント。6-10頁。
10. 「提言書 明日の地域づくり委員会（第10期）平成21～22年度」	共著	2010年12月	茨城県庁	茨城県・第10期県央地域明日の地域づくり委員会委員（2009年4月～2010年3月）として、2年間の討議の末、提言書を作成。環境・教育・文化に関する計34の提言を共同執筆した。56頁-70頁を担当。
11. 「カナダにおける移民、民族性、多文化主義：ナショナル・アイデンティティをめぐる最近の動向」	単著	2011年3月	『多言語・多文化社会におけるこれからの教育』常磐大学教育実践研究所	常磐大学教育実践研究所主催の「2010年度夏季シンポジウム」において、ヴィクトリア大学名誉教授のJoseph F. Kess氏の基調講演のコーディネーターとして、また当日の通訳者として、3時間の基調講演を報告書にまとめた。
12. 「スイスと日本における子育ての経験」	単著	2011年3月	『多言語・多文化社会におけるこれからの教育』常磐大学教育実践研究所	上記シンポジウムにおいて、分科会Ⅱのコーディネーターを務めたが、そこで発表者であったC. R. Bussinger氏の発表内容とディスカッションについてまとめたもの。
13. 「外の世界へ」	単著	2013年3月	『ENGCOMM STATION』4th Ed. 東洋大学	東洋大学の広報誌に「国際理解教育論」「国際理解」の講義や、地球市民としての生き方について語ったもの。P26-32
14. 「Teaching Assistant」	単著	2014年3月	『Topos』Vol. 71 常磐大学	常磐大学の広報誌に、留学生のTAが授業参加することでどのような学習効果があるのかを述べたもの。1頁。
15. 「なたねプロジェクト：タネは命の循環」	共著	2014年3月	『平成25年度 持続可能な地域づくりを担う人材育成事業 地域版 ESD環境プログラムガイドブック』	環境省主催のESD環境教育学習プログラムの報告書。新荘小学校でのESD授業の実践報告。19頁。

16. 『平成26年度 JICA筑波 マラウイ教師海外研修教材と出会う 国際理解教育 授業実践報告書』	共著	2015年2月	独立行政法人国際協力機構 筑波国際センター (JICA筑波)	JICA筑波主催のマラウイ教師海外研修にアドバイザーとして同行。7-13頁
17. 『いばらきESD実践研究会 ESDリーフレット』	共著	2015年8月	いばらきESD実践研究会	JICA筑波からの助成金を受けて出版したESDに関する10頁のリーフレット。大野寛氏との共著。
18. 書評「じゅんぴはいいかい?名もなきこざるとエシカルな冒険」(Are you ready? :The Journal to the Veiled World)	単著	2021年9月	『新英語教育』(No. 625, 2021年9月号)	編集者からの依頼で、和書『じゅんぴはいいかい?』とUCI学生による翻訳書『Are you ready?』について、SDGsと絵本のつながりをテーマに書評を書いた。
19. 「SDGsシンポジウムでの発表」	単著	2022年3月	『水戸ユネスコだより』水戸ユネスコ協会	常磐大学・茨城大学連携大学シンポジウム「地球の未来にSDGsをどう活かせるか-大学の役割と実践の知恵」での発表について報告。
20. 「常磐大学生による国際交流活動」	単著	2022年10月	『伝えよう! 平和の心を創立40周年記念誌』水戸ユネスコ協会	これまで水戸ユネスコ協会の支援を受けて実施してきた、常磐大学生の国際交流活動を整理して報告したもの。17頁。
21. 「The Philippines 常磐大学海外研修C 2022年度」	共著	2023年6月	常磐大学 (フィリピン研修報告書編集委員会)	2023年2月19日~3月4日までの2週間、フィリピンのネグロス島での活動を整理した報告書。報告書全体の監修し、科目担当教員としてメッセージを寄稿。2頁。
22. 「SDGs (持続可能な開発) を目指して『実践情報交換会』綴」	共著	2024年3月	茨城県ユネスコ連絡協議会	茨城県ユネスコ連絡協議会主催のSDGs実践情報交換会の記録冊子。小関の講演内容と、小関がSDGs視点から5つの実践報告について講評した内容も収録されている。11-12頁。
(国際学会発表) 1.				
(国内学会発表) 1. 「子ども同士の関係にみる『協同』の発達過程: R. L. セルマンの発達研究を基軸として」	単独	1993年8月	第52回日本教育学会 (立教大学)	R. L. セルマンによる、ピア・セラピーの実証研究を素材として、子ども同士が「協同」の関係を築き上げていくプロセスを検証。そのプロセスを段階論的に特徴付けることによって、各段階で教師が子ども同士の協同を育むために果たすべき役割について考察した。
2. 「友だち関係の発達と生活指導: 子どもたちの私的世界における『協同』を視軸として」	単独	1994年9月	第12回日本生活指導学会 (広島女子大学)	全生研の「集団づくり」指導の変遷をたどり、公的関係(学級・班)と私的関係(友人関係)をめぐる論争に焦点を合わせた。公的関係だけが生活指導の対象ではないこと、私的世界で「協同」の体験を豊かにしていくことが生活指導の核になりうることを、現場教師の声を手がかりに論証した。

3. 「グローバル教育が開く『総合的学習』の世界：ディビッド・セルビーのグローバル教育論を視座に」	単独	1999年6月	第9回日本国際理解教育学会（帝京大学）	グローバル教育が「細分化するもの見方」（compartmentalization）を鋭く批判し「相互連関性」（interconnectedness）を重視してきた歴史と、総合学習が「分化」（分科）と「統合」（総合）をめぐって常に系統学習と対置されてきた歴史に注目し、両者の理論的な同質性に論及した。グローバル教育を総合的学習として位置付けうる理論的根拠を示した。
4. 「グローバル教育から総合学習へ：カリキュラムの共同開発の可能性」	共同	2000年6月	第10回日本国際理解教育学会（奈良教育大学）	グローバル東京・西東京センター主催の「総合学習のためのカリキュラム開発セミナー」を素材に、グローバル教育の参加型手法が総合学習ためのカリキュラム開発にも有効であることを考察した。セミナーのねらいや流れについては石川一喜氏が、参加型学習の特質やカリキュラム開発への可能性については小関が担当した。（発表者小関一也、石川一喜）
5. 「インドを通して、多様性を考える」（パネルディスカッション）	単独	2000年11月	日本国際理解教育学会・実践研究会（目白学園中学校・高等学校）	全体集会のパネルディスカッションに指定討論者として参加。国際基督教大学の千葉晃弘教授の大学院ゼミで考案された総合学習用教材「インドという名のパズル」を、大学教育実践者の立場から、その長所と短所の分析を求められた。私自身のグローバル教育実践をもとに、当該教材を活用した大学版授業案を報告した。このパネルディスカッションの様子は、『海外子女教育』（2001年2月号）で紹介されている。
6. 「地球市民教育における教師の役割：ファシリテーター論からのアプローチ」	単独	2002年6月	第12回日本国際理解教育学会（広島大学）	地球市民教育における教師像が曖昧なまま混乱していることを問題提起。学際的に注目を集めるファシリテーターの概念に理論的整理を試みることによって、アクティビティ中心の地球市民教育における、教師の目標と役割の明確化を試みた。主に心理学領域を尾崎司氏が教育学領域を小関が担当したが、全般を通して二人の共同作業で発表を行った。（発表者小関一也、尾崎司）
7. 「グローバルな視野に立った国際理解教育：地球市民を育むためのプロジェクトー学校・NGO・行政」	共同	2003年6月	第13回日本国際理解教育学会（桜美林大学）	日本国際理解教育学会初の試みであるミニシンポジウムにコーディネーターとして参加。約3時間のシンポジウムを企画・運営した。グローバル教育における学校・NGO・行政の連携をテーマに、広島工業大学付属高等学校の野中春樹氏と日本フォスター・プラン協会の奈良崎文乃氏にもゲストスピーカーとして参加していただいた。（コーディネーター小関一也、話題提供者野中春樹、奈良崎文乃）
8. 国際理解教育と持続可能な開発のための教育	単独	2009年1月	日本国際理解教育学会	特定課題研究「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」第3回公開研究会

9. 「ESDにおけるシティズンシップ：ESDの教育目標を読み解く」	単独	2009年6月	第19回日本国際理解教育学会（同志社女子大学）	『第19回研究大会研究発表抄録』17-18頁
10. 「グローバル時代のシティズンシップ：その圧倒的な多元性・多層性を超えて」	単独	2009年12月	日本国際理解教育学会	特定課題研究「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」第7回公開研究会
11. 「学習領域をつなぐための原点」	単独	2010年7月	第20回日本国際理解教育学会（聖心女子大学）	『第20回研究大会研究発表抄録』21-22頁。日本国際理解教育学会第20回研究大会記念シンポジウムの特別分科会B「国際理解教育と学習領域をつなぐ」において基調提案。
12. 「『グローバルなもの見方』を育む国際理解教育」	単独	2010年7月	第20回日本国際理解教育学会（聖心女子大学）	『第20回研究大会研究発表抄録』25-26頁。日本国際理解教育学会特定課題研究発表「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」（全体会場における3時間半のシンポジウム）にて、研究発表。
13. 「国際理解教育と評価（アセスメント）」	単独	2011年6月	第21回日本国際理解教育学会（京都橘大学）	『第21回研究大会研究発表抄録』77-78頁。国際理解教育における教育評価のあり方について、従来型カリキュラムの評価法の問題点を整理し、予め設定された目標に捉われず、問題解決のプロセスを通して育成される資質や能力の評価方法について分析・検討した。
14. 「国際理解教育における参加型評価の可能性」	単独	2012年7月	第22回日本国際理解教育学会（埼玉大学）	『第22回研究大会研究発表抄録』29-30頁。国際理解教育における参加型評価の可能性について論及。東洋大学での国際理解教育論やJICA筑波でのセミナーを实践事例に、参加型評価の可能性について論じた。
15. 「五感を駆使した多様なもの見方の育成」	単独	2013年7月	第24回日本環境教育学会	『第24回大会研究発表要旨集』39-40頁。常磐小学校1年生生活科の授業「はるたんけん」を事例をもとに、児童、大学生、保護者及び大学教職員がともに参加できる環境教育プログラムの開発過程について報告した。
16. 「子どもの学びが地域をかえる：新荘小学校6年生『なたねプロジェクト』のESD実践を事例として」	単独	2015年8月	第26回日本環境教育学会（名古屋市立大学）	『第28回研究発表要旨集』119頁。「環境省持続可能な地域づくりを担う人材育成事業」において、茨城代表に選ばれたESDの実験的授業について、実践者の立場から研究報告をした。

17. 「難民問題から『きれいごと』を乗り越える教育実践を創る」	単独	2017年4月	日本国際理解教育学会（早稲田大学）	特定課題研究「難民問題から国際理解教育を問う」第1回公開研究会で研究発表。左記特定課題研究を包括する理論的背景について、地球市民教育論の枠組みを用いて発表した。
18. 「産地直売場をフィールドとする環境教育プログラムの開発とアクティブ・ラーニングの可能性」	単独	2017年9月	第28回日本環境教育学会（岩手大学） 研究発表	『第28回研究発表要旨集』153頁。長野県伊那市にある「産直市場グリーンファーム」でのインタビュー調査をもとに、産地直売場で実践しうるアクティブ・ラーニングについて分析し、素案を提示した。
19. 「産直の環境教育プログラムの開発：子どもたちのよる『遊び仕事』の実践を基軸として」（小関）	共同	2017年9月	第28回日本環境教育学会（岩手大学） 自主課題研究	『第28回研究発表要旨集』226頁。28年度に採択された科研費研究グループ5人と、「産直が拓く環境教育の新たな地平」をテーマに、2時間の自主課題研究発表に臨んだ。小関も左記テーマで、1年間の基礎研究の成果を報告した。
20. 「ライフストーリーから教材づくりを考える」	単独	2017年12月	日本国際理解教育学会（早稲田大学）	特定課題研究「難民問題から国際理解教育を問う」第3回公開研究会で研究発表。ライフストーリー研究タスクチームを代表して、ライフストーリーを素材に、難民を考える教材づくりにアプローチする意義について分析した。
21 「難民問題から国際理解教育を問う」（特定課題研究報告）	共同	2018年6月	第28回国際理解教育学会（宮城教育学会）	特定課題研究「難民問題から国際理解教育を問う」の研究グループで、2時間の研究報告を行う。ライフストーリー研究チームを代表して、現段階までの研究の進捗状況を報告した。また、「国内外の難民問題を取り巻く社会構造」をテーマとする参加型ワークショップで、ファシリテーターを務めた。
22 「ライフストーリーというアプローチの可能性：人生の物語が重なり響き合う時に生まれる教育力」	単独	2018年12月	日本国際理解教育学会（早稲田大学）	特定課題研究「難民問題から国際理解教育を問う」第8回公開研究会で研究発表。ライフストーリー研究をベースに、人生の物語が響き合うときに生まれるエンパワーメントを焦点を合わせ、実践事例を分析した。
23 「ライフストーリーを通して学ぶ難民問題：人として出会うことで、難民問題と出会いなおす」	共同	2019年6月	第29回日本国際理解教育学会（椋山女子学園）	『第29回研究発表抄録』50頁。日本国際理解教育学会の特定課題研究「難民問題から国際理解教育を問う」のタスクチームから、小野寺美奈（東京家政大学）、菊地恵美子（仙台育英学園）の2人ともに、研究発表をした。

24 「産地直売場で実践する環境教育：長野県伊那市の産直市場グリーンファームを事例として」	単独	2019年8月	第30回日本環境教育学会（甲陵中高等学校）	『第30回研究発表要旨集』64頁。科研費研究として、産地直売場で実践可能な環境教育プログラムの開発を進めてきたが、グリーンファームの近隣にある伊那西小学校での実践を想定した、具体的なカリキュラム案について研究発表した。
(演奏会・展覧会等) 1. 「梅染め・組紐プロジェクトで広がる国際交流」	共同	2023年3月1日～3月14日	「梅染の明日展」実行委員会	茨城新聞社みと・まち・情報館に於いて、水戸市で梅染めに取り組む複数の団体と展示会を共催。小関ゼミで取り組んできた「梅染め・組紐プロジェクト」について紹介するパネルと作品を展示
2. 「水戸の梅染め～ひろがる世界」	共同	2024年3月1日～3月15日	「水戸の梅染め～広がる世界」実行委員会	茨城新聞社みと・まち・情報館に於いて、水戸市で梅染めに取り組む複数の団体と展示会を共催。小関ゼミで開発した組紐作品と、活動を紹介する大型パネル9枚を展示。
(招待講演・基調講演) 1. 茨城から発信するESD：子どもたちの学びが地域を変える	単独	2014年5月	水戸ユネスコ協会総会	2014年度の年次総会で基調講演。新荘小学校でのESD授業実践を中心に事例発表。
2. Japanese Rice as Food and Culture	単独	2014年8月	Monkey Bay Secondary School, Mangochi, Malawai	アフリカのマラウイ共和国で実施された国際交流プロジェクトでの講演。
3. 「ちがい」多様性から見つめ直す：世界の水問題と私たちの暮らし	単独	2014年8月	公益財団法人茨城国際交流協会、独立行政法人国際協力機構筑波国際センター（JICA筑波）	茨城国際交流協会とJICA筑波が共催した「国際理解教育研修会にて招待講演。
4. 地域に根ざしたグローバル教育：「地域」と「世界」をつなぐ学びのために	単独	2014年9月	公立大学法人島根県立大学	平成26年度FD研修会にて招待講演。
5. 社会科教育と国際理解	単独	2014年11月	茨城県教育研修センター	平成26年度社会・地理歴史・公民研修会にて招待講演。
6. ESDの視点を取り入れた授業づくり：「地域」「行動」「持続可能な社会」を鍵概念として	単独	2015年1月	社会科教育開発学会	年次研究発表大会の基調講演。
7. グローバルなもの見方とグローバル時代の教育	単独	2015年2月	茨城工業高等専門学校	平成26年度FD研修会で招待講演。
8. 地域から発信する環境教育：持続可能な社会の実現を目指して	単独	2015年10月	茨城県立水戸第二高等学校	「水戸二高環境科学フォーラム2015」にて基調講演。

9. 世界の食料事情と私たちの暮らし：「食」を通して「世界」をみる	単独	2016年8月	常磐大学智学館中等教育学校	平成28年度「地球市民学講演会」にて招待講演。
10. 持続可能な開発目標（SDGs）と地域で取り組む環境学習	単独	2017年10月	茨城県立水戸第二高等学校	「水戸二高環境科学フォーラム2017」にて基調講演。
11. Sharig Our Hometown Treasure in Bago	単独	2018年2月	Bago City Elementary School, Negros Occidental, the Philippines	「Ineternational Chilren's Painting Exchaging Porject in the Philippines」（水戸ユネスコ協会・OISCA Bago Traning Center共催）にて基調講演。
12. 「自分化と異文化をつなぐ国際交流プロジェクト-常磐大学フィリピン研修を事例として」	単独	2018年5月	水戸ユネスコ協会総会	2018年度の年次総会で基調講演。常磐大学フィリピン研修における学生主体のプロジェクトを中心に発表
13. Sharig Our Hometown Treasure in Kigari	単独	2018年8月	Umuco Mwiza School, Kigarli, Rwanda	「Ineternational Chilren's Painting Exchaging Porject in Rwanda」（水戸ユネスコ協会/NPO THINK ABOUT EDUCATION IN RWANDA共催）にて講演。
14. 「地球市民を育む学習：グローバルなものを見方を中心に」（地球市民教育研修会）	単独	2019年7月	京都府立紫野高等学校「地球市民教育教員研修会」	「地球市民教育研修会」（FD研修会）に講師として招かれ講演。
15. フェアトレードで育むグローバルなものを見方-身近な買い物で、日常と世界をつなごう」（令和元年度消費者教育講演会）	単独	2019年7月	水戸市役所（市民協働部）「消費者教育講演会」	「令和元年度消費者教育講演会」に講師として招かれ講演。
16. 「共に生きるという選択：“アフリカの奇跡”を生み出した女性たちの力」	単独	2019年10月	茨城県女性団体連盟、常磐大学「若者と大人世代の交流啓発フォーラム」	「若者と大人世代の交流啓発フォーラム」に、登壇者の一人として招かれ講演。
17. 「地球市民教育論：グローバル時代の教育が目指すもの」	単独	2019年11月	兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科「2019年度教育実践学フォーラム」	「教育実践フォーラム」（大学教員・大学院生・一般市民を対象）に講師として招かれ講演。

18. 「“地域”と“世界”をつなぐ大学教育の可能性：フィリピン研修におけるSDGs実践から」	単独	2021年11月	常磐大学・茨城大学連携シンポジウム「地球の未来にSDGsをどう活かせるか—大学の役割と実践の知恵」に登壇。登壇者によるディスカッションにも参加した。NHK茨城で放送。
19. 「エシカル消費とSDGs教育実践：フェアトレード活動を事例として」	単独	2022年2月	令和3年度消費者教育講演会で講演。講演録画が水戸市役所のHPで2年間掲載。 https://www.city.mito.lg.jp/001133/001225/p025156.html
20. 「地域と世界をつなぐSDGs活動～常磐大学生のプロジェクトを基軸として」	単独	2024年3月	茨城県ユネスコ連絡協議会 茨城県内の5つのユネスコ協会が共同で主催した「SDGs（持続可能な開発を目指して）実践情報交換会」に講師として招待を受ける。講演後、各協会が取り組んできた活動に対して講評も行った。セミナーも発表の機会をいただいた。
(受賞(学術賞等)) 1 「国際文化フォーラム賞」	単独	2002年3月	第26回国際理解教育賞論文選考委員会 国際理解教育研究において最も権威と伝統のある論文コンクールで、拙論「地球市民教育の実践課題：地球市民教育概念の構造的理解を中心として」が受賞。

研 究 活 動 項 目

助成を受けた研究等の名称	代表, 分担等の別	種 類	採択年度	交付・受入元	交付・受入額	概 要
(科学研究費採択) 1. 「産直が開く環境教育の新たな地平—「遊び仕事」の現代的活用を目指して」	分担	科研費B一般	2016年度	日本学術振興会	13,300,000円	宮城教育大学の溝田浩二を代表とし、産地直売場をフィールドに地域に根ざした新しい環境教育プログラムの構築を目指す。
2. 「国際理解教育における難民問題と市民性形成—欧州の協働実践に学ぶ教材開発」	分担	科研費C一般	2016年度	日本学術振興会	3,300,000円	目白大学の横田和子を代表とし、海外の事例を参考に、難民問題をテーマとする教材研究を行う
(競争的研究助成費獲得(科研費除く)) 1. 「グローバル時代の国際理解教育とシティズンシップ」	分担	特定課題研究	2008年度	日本国際理解教育学会	900,000円	筑波大学の嶺井明子を代表とする3年間の研究プロジェクト
2. 「難民問題から国際理解教育を問う」	分担	特定課題研究	2016年度	日本国際理解教育学会	600,000円	日本国際理解教育学会の2016年度特定課題研究。早稲田大学の山西優二を代表とし、難民問題から新しい国際理解教育プログラムの構築を目指す。

(共同研究・受託研究受入れ)						
1. Play:Imaginative Learning	分担		2005年度	University of Toronto	C\$10,260	Prof. Linda Cameronを代表とする「遊び」に関する研究プロジェクト
2. 「茨城ESD（持続発展教育）実践ネットワーク」	単独	指定寄付金	2009年度	(株)常陽銀行	150,000円	持続可能な社会の構築にむけたネットワークづくりとインターネットを利用した発信
(学内課題研究(共同研究))						
1. 「水戸の小学生に向けた沢渡川流域の環境教育プログラム」	分担	—	2011年度～2013年度	—	4,500,000円	常磐大学人間科学部松原哲哉を代表とする3年間の研究プロジェクト
(学内課題研究(各個研究))						
1.	—	—		—		
(知的財産(特許・実用新案等))						
1.	—			—	—	